

The First Night

第一夜

こんな夢を見た。

腕組をして枕元^{すわ}に坐っていると、仰向^{あおむき}に寝た女が、静かな声でもう死にますと云う。女は長い髪を枕に敷いて、輪郭^{りんかく}の柔らかな瓜実顔^{うりざねがお}をその中に横たえている。

真白な頬の底に温かい血の色がほどよく差して、唇^{くちびる}の色は無論赤い。とうてい死にそうには見えない。

しかし女は静かな声で、もう死にますと判然^{はつきり}云った。自分も確^{たしか}にこれは死ぬなと思った。そこで、そうかね、もう死ぬのかね、と上から覗^{のぞ}き込むようにして聞いて見た。

死にますとも、と云いながら、女はぱっちり^あと眼を開けた。大きな潤^{うるおい}のある眼で、長い睫^{まつげ}に包まれた中は、ただ

一面に真黒であった。その真黒な^{ひとみ}眸の奥に、自分の姿が^{あざやか}鮮に浮かんでいる。

自分は^す透き^{とお}徹るほど深く見えるこの黒眼の^{つや}色沢を眺めて、これでも死ぬのかと思った。それで、ねんごろに枕の^{そば}傍へ口を付けて、死ぬんじゃないだろうね、大丈夫だろうね、とまた聞き返した。

すると女は黒い眼を眠そうにたまま、やっぱり静かな声で、でも、死ぬんですもの、仕方がないわと云った。

じゃ、^{わたし}私の顔が見えるかいと一心に^{いっしん}聞くと、見えるかいて、そら、そこに、写ってるじゃありませんかと、にこりと笑って見せた。自分は黙って、顔を枕から離れた。腕組をしながら、どうしても死ぬのかなと思った。

しばらくして、女がまたこう云った。

「死んだら、^う埋めて下さい。大きな真珠貝で穴を掘って。そうして天から落ちて来る星の破片を^か墓^け標^{はかじるし}に置いて下さい。そうして墓の傍に待っていて下さい。ま

た逢^あいに来ますから」

自分は、いつ逢^あいに来るかねと聞いた。
「日が出るでしょう。それから日が沈む
でしょう。それからまた出るでしょう、
そうしてまた沈むでしょう。――赤い日
が東から西へ、東から西へと落ちて行く
うちに、――あなた、待っていられます
か」

自分は黙^うって首肯^{なず}いた。女は静かな調
子を一段張り上げて、
「百年待っていて下さい」と思い切った
声で云った。

「百年、私の墓^その傍^ばに坐^まって待っていて
下さい。きっと逢^あいに来ますから」

自分はただ待っていると答えた。する
と、黒い眸^{ひとみ}のなか^{あざやか}に 鮮^{あざやか}に見えた自分
の姿が、ぼう^{くず}と崩れて来た。静かな水
が動いて写る影を乱したように、流れ出
したと思ったら、女の眼がぱちりと閉じ
た。長い睫^{まつげ}の間から涙が頬へ垂れた。
――もう死んでいた。

自分はそれから庭へ下りて、真珠貝で
穴を掘った。真珠貝は大きな滑^{なめら}かな縁^{ふち}
の鋭^{する}どい貝であった。土をすくうたびに、
貝の裏に月の光が差してきらきらした。
湿^{しめ}った土の匂^{におい}もした。穴はしばらくし
て掘れた。女をその中に入れた。そうし
て柔らかい土を、上からそっと掛けた。
掛けるたびに真珠貝の裏に月の光が差し
た。

それから星の破片^{かけ}の落ちたのを拾って
来て、かろく土の上へ乗せた。星の破片
は丸かった。長い間大空を落ちている間^ま
に、角^{かど}が取れて滑^{なめら}かになったんだらう
と思った。抱^だき上^あげて土の上へ置くうち
に、自分の胸と手が少し暖くなった。

自分は苔^{こけ}の上に坐った。これから百年
の間こうして待っているんだなと考えな
がら、腕組をして、丸い墓石^{はかいし}を眺めてい
た。そのうちに、女の云った通り日が東
から出た。大きな赤い日であった。それ

がまた女の云った通り、やがて西へ落ちた。赤いまんまでのつと落ちて行つた。

一つと自分は勘定^{かんじょう}した。

しばらくするとまた唐^{から}紅^{くれない}の天道^{てんとう}がのぼり^{のぼ}と上つて来た。そうして黙つて沈んでしまった。

二つとまた勘定した。

自分はこう云う風に一つ二つと勘定して行くうちに、赤い日をいくつ見たか分らない。勘定しても、勘定しても、しつくせないほど赤い日が頭の上を通り越して行つた。それでも百年がまだ来ない。

しまいには、苔^{こけ}の生^はえた丸い石を眺めて、自分は女に欺^{だま}されたのではなからうかと思ひ出した。

すると石の下から斜^{はす}に自分の方へ向いて青い茎^{くき}が伸びて来た。見る間に長くなってちょうど自分の胸のあたりまで来て留^{ゆる}まつた。と思ふと、すらりと揺^{くき}ぐ茎の

いただき 頂^{かたぶ}に、心持首を傾^{つぼみ}けていた細長い一輪の蕾^{はなびら}が、ふっくらと弁を開いた。

真白な百合^{ゆり}が鼻の先で骨に徹^{こた}えるほど匂った。

そこへ遥^{はるか}の上から、ぽたりと露^{つゆ}が落ちたので、花は自分の重みでふらふらと動いた。自分は首を前へ出して冷たい露の滴^{したた}る、白い花弁^{はなびら}に接吻^{せつぶん}した。自分が百合から顔を離^{ひょうし}す拍子に思わず、遠い空を見たら、暁^{あかつき}の星がたった一つ瞬^{またた}いていた。

「百年はもう来ていたんだな」とこの時始めて気がついた。